



## 蜻蛉の魅惑

——詩人グランゴールの幼時の想ひ出——

讀者諸君も嘗ては少年であつたであらう、恐くは今一度さうあり得たならば幸福だと思ふに違ひない。私自身もこの少年時代を、毎日最も有効に費したのであるが、諸君はたびく、麗らかな日、清水の流れる小川の岸を、急な曲り角で翅を毀したり、或は小枝に接吻して、そここゝに飛びまわる青色や緑色の美しい蜻蛉の跡を逐つて、叢から叢へミ駆け廻つたこきがあるに違ひない。紫色と碧色の翅をばたきさせながら、風を切つて浮游してゐるこの小さな渦巻のやうな感じのする蟲に、諸君は身も心も奪はれて、好奇の眼を注いだこきを想ひ出すだらう。その駆ける速さに眩されて、翅のはばたきの中には、何とも捕へやうのない形ものが現れてゐると思つたに違ひない。この翅の顫動の中に、もやくした陽炎のやうな形を見るに、諸君は

夢のやうな幻のやうな、觸るこきも見るこきも出来ないものがあるやうに思つたに相違あるまい。が、遂に蜻蛉が葦の葉末に止るに、諸君は息を殺して、その長い紗のやうな翅や、エナメルのやうな體や、水晶のやうな眼を見つめた時、その驚きは何に喩へやうもない位であつただらう。そして、蜻蛉の體がまた影のやうに空中に飛び去つて、それが夢の中のものになつてしまふこきを恐れる氣持は、どんなであつただらうか。

春陽堂世界名作文庫

ユーゴー作、ノートルダム僞僕男(前篇一五一頁)

ユーゴー三部作(レ・ミゼラブル。海の勞働者。

ノートルダムの僞僕男)の一